

学校だより

7月号

やさしい子 たくましい子 考える子



黒門

発行日 令和7年6月30日
発行者 台東区立黒門小学校
校長 飯塚 雅之

「やさしさ」の本当の意味

校長 飯塚 雅之

日ごとに陽ざしが強まり、季節が確かに進んでいることを感じます。一学期も終盤に差しかかり、子供たちはそれぞれの学びを胸に、次のステップへと歩みを進めています。

6月は「ふれあい月間」でした。都内の全ての公立学校でいじめ防止に取り組む月です。ふれあい月間にちなんで1冊の絵本のことを思い出しました。

レイフ・クリスチャンソンさんの『わたしのせいじゃない -せきにんについて-』という作品です。

学校の教室で一人の男の子が泣いています。一体どうしたのでしょうか。他の子供たちの言い分はこうです。

「学校のやすみじかんに あったことだけど わたしのせいじゃないわ」

「はじまったときのこと みてないから どうしてそうなったのか ぼくはしらない」

「ほんとうは わたし みたの だから しているの でも とにかく わたしのせいじゃないのよ」

どうやらいじめが原因で男の子は泣いているようです。ところが、他の子供たちの言い分はどこか他人事のようにです。

自分が加担していなければ悪くないのでしょうか。みんながしているなら許されるのでしょうか。少しだけなら許されるのでしょうか。いじめられるほうが悪いのでしょうか。

この絵本には、子供たちの「わたしのせいじゃない」という言い分が描かれています。いじめを傍観していた子供たちも、実際に加担した子供たちも、何かしらの責任があるというのに淡々と自分の言い分を話します。

「やさしい子」とは、いったいどんな子でしょうか。困っている人に手を差し伸べられる子、傷ついた友達に寄り添える子。たしかにそれは、分かりやすいやさしさのかたちです。

けれど、本当のやさしさとは、「自分には関係ない」と思わずに、「それ、おかしいな」「だれかが困ってるな」と気付き、行動に移す力なのではないかと思ったのです。

今年度、本校の重点目標は「やさしい子」。それは「にこにこ笑って、やさしい言葉をかけられる子」だけではありません。時には、「なぜ誰も止めなかったのか?」と問い返す勇気をもつ子。「このままでいいのかな?」と感じて、声をあげることができる子。そんな、見えないやさしさや、勇気あるやさしさを大切に育てたいと考えています。

やさしさは、時に孤独な選択を伴います。「まわりがそうしているから」ではなく、「自分はどうするか」を問い続けること。それは子供たちにとっては難しいことかもしれませんが、だからこそ、学校がその「はじめの一步」を応援する場でありたいのです。

今月末には、一学期の締めくくりと夏休みが待っています。節目のこの時期に、ぜひご家庭でも「やさしさって何だろう?」という対話をもっていただけたらと思います。簡単な問いではありません。でも、だからこそ、考え続ける価値のある問いです。

一転してこの絵本の後半では、原爆のキノコ雲や貧困で苦しむ子供、油まみれになった鳥などの写真が綴られています。これらの写真は、直接的には私たちの暮らしと関係のないことなのかもしれませんが、それでも私たち一人一人の責任を感じさせられます。

それはきっと、この絵本の前半を読んで何かを感じたから…